

いた。さすがにお盆には、親戚たちとお墓参りをした。まだ子供のころ、僕はこのお墓参りの最中に、先祖代々の墓を前にして、「これは生きてる人間の自己満足だ」と言い放ち、親戚のひんしゆくを買ったことがある。

もっとも父親にはこれが

アボリジニ社会における儀式の重要性について、話には聞いていた。だから、グリンジの村にも随分住み慣れてきていたのだが、儀式に参加したいと安易に申し出ることはしなかった。

生命 あふれる 大地

アボリジニの世界

保莉実

□8□

不信心な両親のもとで育った。初詣でに連れて行ってもらった記憶がない。家を新築したとき、祖母に強く言われて居間に神棚をつくったらしいのだが、母親は「神様はおばあちゃんの家につくし中よ」などと言っただけで、お盆参りに行っては、賢い子だった」と今でもこのときの思い出話をする。無神論、合理主義、近代主義、世俗主義、科学主義、なんと呼んでもいいが、わが家は、高度成長期とバブル期をへた新潟の、戦後日本の、極

儀式に加わる ①

許された者のみ知る神秘

村から車で二十分ほど走ったところに連れて行かれた。そこには成人男性だけに入場を許されている秘



ある儀式。中央が通過儀礼をうける少年たち

言った。村から車で二十分ほど走ったところに連れて行かれた。そこには成人男性だけに入場を許されている秘

が、多くは「ようこそ」と笑顔で合図を送ってくれた。日常生活から切り離された、もう一つのアボリジニ類がある。動植物の数をバ

二社会とは無縁である。(歴史学者―新潟市出身)

言った。村から車で二十分ほど走ったところに連れて行かれた。そこには成人男性だけに入場を許されている秘

ある儀式。中央が通過儀礼をうける少年たち

が、多くは「ようこそ」と笑顔で合図を送ってくれた。日常生活から切り離された、もう一つのアボリジニ類がある。動植物の数をバ

そんなとき、長老の一人が僕の前に現れ、「おまえは、ここに暮らしてしばらくたつ。もうそろそろ儀式に参加してもよからう」と

密の儀式会場があった。集まっていた大勢のアボリジニの人々が、僕の姿に目をとめる。「なぜよそ者がここに来るのだ？」という不

ランズよく増やすための増殖儀礼、大人になるための成人儀礼、法を破った者に罰を加えるための儀式、子供の誕生を祝う儀式、お葬式など。

二の世界がそこにあった。多くの日本人にとって、宗教的世界のリアルさほどピンとこないものもないかもしれない。

日本で宗教を語ると、オカルトめいた怪しげな話と受けとられることが多い。そうでなければ、お盆や初詣のように、宗教的内実よりも昔からの習慣といった程度の役割しか与えられていない儀式が多い。

だがグリンジ社会においては、それを遂行しなければ世界が正常に機能しなくなるという、深刻で具体的な必要のためこそ儀式が行われる。

許された者だけが、許された場所、世界存立の神秘の一部を知ることが許されるアボリジニ社会では、社会全体がもっている知識の総体を知る者はいないし、すべてを知ろうと望む者もない。全体像を知ろうとする欲望は、アボリジニ社会とは無縁である。